

第6回当別町まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会 会議要旨

- 1 日 時 平成27年10月8日(木) 14:00~16:00
- 2 場 所 当別町役場 1階 大会議室
- 3 出席者 山田委員長、川村委員、中家委員、南部委員、笠松委員、伊藤委員
田辺委員
- 4 説明員等 二木部長、長谷川課長、小畑係長、樺澤主事
- 5 傍聴者 4名
- 6 会議要旨

議題 当別町まち・ひと・しごと創生総合戦略(案)について

< 報告事項 >

総合戦略に係る意見交換会の実施状況について

- ・ 9月10日(木) 当別町商工会
当別町商工会青年部・女性部、当別青年会議所
 - ・ 10月5日(月) 萌木の会(子育てサークル)
 - ・ 10月7日(水) 北海道新聞社編集局報道センター
 - ・ 10月8日(木) 絵本交流会(子育てサークル)
- 上記団体に対して意見交換会を行った旨報告した。

< 協議事項 >

資料1に基づき、事務局から第4回、第5回委員会での委員意見の反映状況について説明。その後、中家委員より基本目標(3)町に人を呼び込む「定住・交流」の促進に関して次のとおりプロジェクトの提案があった。

【中家委員】

- ・ 冒頭の総合戦略策定の趣旨のところ、「当別町でなければできない付加価値をどのように創造するかという視点が非常に大切」という表現がありますが、私もそれに近い感覚を持っていて、数値目標を立てて、Aが何人増えて、Bが何人増えて、それを足すと数値目標が達成するというような足し算で考えていくのは本末転倒で、AやBが増えたのはどんな理由で、どんなアクションを起こして当別にきたのかということが、非常に難しいながらも重要ではないかと感じているところ。
- ・ 今回提案するのは、私の立場で、観光施策というものをどのように考えたらよいのかということについてで、まず前段として私の考えの根底にあったところを整理したい。前回の委員会で「そうだ、京都に行こう」という話をしたが、それは、京都には知名度があるので、それを思い出させて京都に行こうということで、京都が皆の周知の前提で「京都に遊びに来ないか、忘れていないか」という意味の広報戦略の方法だった。これを当別であてはめて考えてみると、「当別ってどこだっけ」「当

別に一度も行ったことがない」という段階から、「あの当別でしょ」「当別に一度行ってみたい」という段階、そして「当別ってすごいね」「当別って有名だよ」というようにフェーズがどんどん上がって行って、最終的には「そうだ、京都に行こう」というように知名度を上げていく必要があって、これは非常に時間がかかることで、突発的なイベントのような一過性のものではなかなか実現できない。当別に住んでいる人から、当別はどんどん人口が減っているとか、そういうネガティブな話を聞くが、当別には必ず価値があると思う。まずは町民がまちに誇りや愛着を持ち、まちの魅力を自ら外に向けて発信していくといったベースがあったうえで、外からのアイデアを足して行って、それに町民の立場でさらに付加して行って地域ブランドを構築していくということが大切なことではないかと思う。そういうことが、本来の魅力あるブランドアイデンティティというか、「そうだ、当別に行こう」という揺るがない当別のアイデンティティになっていくのではないかと思う。

- ・当別のインナータイトルは何か。これは外に出ていくタイトルではなく、自分のまちはすごいというアイデンティティを持ったうえで、皆が当別に行きたい、住みたいと思うブランド戦略を構築していくということ。その際に、絶対に揺るがない要素として、まちの魅力や誇り、愛着があって、そこから当別町だけの他にはない付加価値のあるコンテンツをカテゴリーごとに整理していくが必要になる。例えば「四季と自然」については、当別の冬期が厳しいといいながらも、四季があるということを利点として、逆転の発想ができないかということ。それから基幹産業である農業、そしてそこから生まれる食材、あとは歴史文化、交通網、南北に長いという地形、そして町民とそれが集まってできるコミュニティ、そういったものをカテゴリーにまとめながら、どういう方向性を目指すかを整理する必要がある。
- ・まず、100万人の観光客をまちに呼び込もうとしているので、それだけの多くの人を動かすためには、ターゲット特性や属性を含めて、心に響くものを作っていく必要がある。それは時代性であったり、トレンド感や次代性、そして未来性があって、一過性ではなくて継続できるようなもので、そこには必ず経済効果が生まれるということも必要。そしてそのためには町民や外部を含めた強いつながりのある連携が必要で、そういうプロジェクトが出来たらすばらしいというところから考え始めたい。
- ・まず、農業と食という基幹産業である農業にとっては最大のテーマとして「未来もおいしい、当別プロジェクト」ということで、広告的な言い方をしているが、今ももちろんそうだけれども、未来永劫、当別でつくられるものはずっと美味しいというインナープロジェクトを考えた。当別は道内最大のマーケットである札幌に近く、食を担う農業というものが非常に重要な産業として成り立っている。品質・安全性という、人々が非常に興味を持って、今後も揺るがない必要不可欠な財産のようなものを、次につなげていく企画づくりを意識して取り組んでいきたい。具体的には、

まず「**当別農学校**」。これは子どもを中心とした食育活動を、農業と非常に密着した中でやっていってはどうかということ。農業の収穫体験や加工ができて、農業に関してはここに来ればいろいろなことが学べるようにして、そこに各施設や指導者、インフラも足していって、内外に向けて当別は農業に関しての学校であるということで、子どもの食育を中心に謳っていく。将来的には両親を含めた大人向けのプログラムなども考えていきたいところ。次は「**農のバトン**」。昨今では離農される方がいるということで、当別でもそのような方がいるのではないかと思う。ただ、他県でみると、非常に若い方が農業に携わって、農業を非常に前向きに、そして今の時代に合わせて産業として農業に携わって成功している事例がある。これはそういうイメージ。総合戦略の中にも農業のことが書いてあるが、ここでは若い新規就農者を町として受け入れることをやっていけないかということ。その活動自体が当別の農のバトンという非常に価値のある行為で、内外に向けて、当別は基幹産業である農業をうまく活かしていると感じさせるような内容にできればと思う。次は「**当別農園**」。これは、既に民間では貸し農園をやっているというのは知っているが、離農者による技術指導も含めて、札幌圏の近郊在住者をターゲットとして農業の専門の貸し農園を運営していくという内容。収穫の時期には、貸し農園を利用している方々全員で、農業に携わっている喜びを収穫祭のような形で共有できる仕組みをつくり、単純に場所を貸して農業をしてもらっただけではなく、アウトプットまで含めてやっていくというイメージ。次は「**当別トラックマーケット**」。これは現に当別では軽トラマーケットとしてやっているが、それをもう少し拡大解釈するイメージ。トラックマーケットというのは商標登録がされていて、東急ハンズさんのほうで商品をトラックに載せているいろいろなイベントに持ち込むという事業を行っている。これをデザイン会社の視点として考えると、もちろん経費のことは考えなければならないが、当別のトラックマーケットの仕様を確立して、札幌圏に当別の最高の食材を提供するというような付加価値を付けた事業を行えないか、ということ。近郊都市だったかと思うが、野菜ソムリエがトラックマーケットのようなものを行っているところがあって、そこでは実際にレストランのソムリエのような恰好をして、一般の方々に野菜ソムリエというノウハウの提供を前提とした野菜の販売を行っているということがあった。このようなことが当別で付加価値をもってできないかということ。次は「**当別グローサリー**」。これは6次産業化に向けた取り組みをイメージしている。当別には「とうべつブランデリ」というものがあるが、これは商品として出来上がったものにとうべつブランデリのマークをつけるという発想だが、そうではなくて、商品をつくる過程や価値観に水準を付けて、品質が合格点に達すればパッケージやデザインも含めて認証するという仕組みを作れば、そのデザインは商品の製造過程をふまえたデザインとなるので価値も非常に高くなってくる。ADCというデザインのコンペティションがあるが、何年か前にそこで規格外野菜を売る

ためのPP袋に貼るシールのデザインがあって、規格外商品もデザインや広告の方法によって消費者の理解が得られて販売が可能になっていく。規格外商品は品質が悪いのではなくて形が悪いだけで、それらをカット野菜のほうに流していくのではなくて、消費者に理解してもらったうえで、非常に価値の高い当別の商品として提供していくといったようなところを含めて、当別グロサリーという6次産業化を図っていけないかと考えたところ。その先にワインやクラフトビールといったものの検討があると思うが、そのためには施設に非常に費用がかかるうえ、それを企業だけでやるのでは、その企業が撤退すればそれで終わってしまうものになってしまうので、まずは販売形態やパッケージ等の見直しや、将来を見据えて若い人たちにワインプラントの苗植えから参加してもらうなど、時間はかかるが揺るがない当別の付加価値の高いオリジナリティのあるグロサリーを作っていければよいのではないかと思う。

- ・「カラダHAPPY、当別プロジェクト」について。まず「**楽しみやすい環境整備**」。これは、たまたま当別の自転車（バイク）について取材をする機会があって、当別は農道があり、適度な坂があり、高岡を抜けて厚田方面や、青山ダムを抜けて望来方面など、自転車仲間の中では非常に有名になっている。車に自転車を積んで当別に来る人もいる。環境整備というのは道路を直すといった大きなインフラ工事をするのではなく、日本では関西圏が進んだ取り組みを行っているが、例えば自転車のマークをピクト化して自転車専用道路や自転車の休憩所といった自転車のインフラを整備するイメージ。欧米諸国では道の駅のようなところにバイクステーションがある。当別がバイクの町ということであれば、当別の道の駅でもそういったことが検討できないかと思う。次に「**スポーツ&アウトドアアクティビティの拠点づくり**」について。これは当別から道民の森に向かうと、ちょうど中間あたりに弁華別小学校があるが、そこに自動販売機があるだけで他には水一つ売っていない。道民の森に着けばまた自動販売機があるが、そう考えると当別から道民の森へと続く道には拠点というものがないと思う。弁華別小学校は歴史的建造物として非常に価値があり、今年度で閉校ということなので、そういった場所をアウトドアアクティビティの拠点として活用していくことができないかと思う。次に「**当別町のフィールドをステージにした各種イベントの開催**」について。当別町のフィールドをステージとした各種イベントを、スポンサーがついたからやるということではなく、ひとつひとつ方向性とフィールドが合っていればスポーツ団体等も誘致することができる。また、相反することを言うと、冠スポンサーがあって、そのスポーツをその場所でやるのであれば協力したいという話の持っていく方もあるのではなかと思う。具体的話でいくと、まずは「自転車」について。北海道でも自転車のイベントが大小含めて年間70～80ほど開催されている。世界で一番大きい規模のものは、ニューヨークで開催されるファイブ・ボロ・バイクツアーというもので、2日間ニューヨ

ークが自転車だらけになる。そういうイベントを北海道で、当別であればできるのではなからと思う。それから「トライアスロン」。これは洞爺で国際的な、非常に大きなトライアスロンのイベントがあって、当別町には海がないが、近郊の石狩市といったところと組んで、縦長のトライアスロンコースを演出してはどうかと思う。「トレイルラン」は昔のクロスカントリーのようなもので、これからしばらく流行るのではないかと思う。当別には道民の森があり、そこにはコースもあるので、そういったところでやるスポーツイベントのイメージ。「クロスカントリー」は、当別には多くのゴルフ場があり、アイスヒルズホテルではゴルフ場を使ってアクティビティとしてスノーモービルをやっているが、そういったことの延長上で、国際レベルまで上げることでできるフィールドではないかと思う。「ランニング、ウォーキング」は、今が旬で、健康志向があるうちに、当別は「カラダHAPPY、当別」だということで、スポーツに関しては非常に理解があるまちだということを実践していくことも必要ではないかと思う。「キャンプイベント」については、道民の森というバックボーンが当別にはあるので、こういったアウトドアコンテンツを子ども向けから家族向け、あるいは冬季、大人向けなどいろいろなコンテンツで行えると思うので、道民の森は北海道の施設で当別町のものではないといった発想を超えて、積極的に活用してはどうか。

- ・「スカンジナビアンライフ in 当別プロジェクト」について。これは北欧のスウェーデン王国レクサンド市と姉妹都市なので、その要素を使い倒してみてもどうかという提案。アイスヒルズホテルや夏至祭はスウェーデンヒルズで行われているが、それが丘の上の話ということではなく、町全体で考えても当別町と北欧は馴染みが良いと感じている。そう考えると、札幌のLOPPISというヨーロッパのマルシェみたいなトーンで、自然に近い素材を使ったようなイメージが当別の道の駅にも合うのではないかと思う。そしてそこにはアートがあり、フォレストガーデンがあり、マルシェがありということで、北欧という切り口の中で、当別に合うものを考えてはどうかと思う。
- ・最後に「伊達家ヒストリーfrom 当別プロジェクト」について。これは伊達家とのつながりが強い当別を、どうにか内外に向けてブランド力を作れないかという視点で考えたもの。当別は大崎や宇和島と姉妹都市なので、正真正銘の伊達家のつながりという強みがあると思っているが、それがなかなか活かせていないという気がしているので、例えばJRを使った伊達家の縁のイベントといったものが作れば、そこには歴女が来るというようなことが期待できるのではないか。そういった価値にできるような見せ方やPRというものが必ずあると思っている。そして、当別以北が少ない車両での編成というところを逆に利用して、一両編成や二両編成という車両編成だからこそ満員列車となるツアーが出来て、そこに当別町産のものを使った弁当の提供といった、そういう全てを商品としたプランが考えられるのではないか

と思う。それからふるさと納税について、以前、宇和島の展示会で当別のふるさと納税PRという話が出たときに、それは姉妹都市である宇和島の税収減にも関係するのでやめたほうがいいという話になったが、そうした当別町の思いやりを逆手にとって、お互いのふるさと納税をお互いの自治体でPRしていくことで、産業ベースをこえて、姉妹都市交流を地で行くやり方はありえるのではないかと思っている。他の自治体のふるさと納税をPRしているところはないわけなので、それがニュースソースになったり話題になったりしてくると思う。

< 議題に対する質疑等 >

【笠松委員】

- ・行政の世界では、計画を作る際には財政の裏付けをどうするかという議論がよくされるが、この総合戦略についてはどう考えているのか。実際問題として、プロジェクトを全部やるということになれば財政が破綻してしまうような状況になってしまっているのではないかと思うので、そのあたりをどう考えていけばよいのかということについて事務局の考えを聞かせていただきたい。

【事務局】

- ・この戦略に記載しているものは、基本的にはすべて必要なものであると考えているが、ご指摘のとおり全てを町の財源でできるわけではないので、補助制度の活用はもちろんのこと、金融機関、民間企業等、いろいろと連携等も含めた中で、事業着手が可能になったものから適宜進めていくという考えで対応していきたい。

【笠松委員】

- ・財源の調達にあたっては国の交付金や民間の資金など苦慮しながら進めていくことになると思うが、この戦略に書かれていることを5年間で全てやっていくということではないということを確認できれば良い。
- ・財源の裏付けがあるものだけを戦略に記載したのでは、内容の浅いものになってしまうので、目標として総合戦略に掲げつつも、ここにある全てを5年間でやっていくということまでは私は求めていない。

【事務局】

- ・総合戦略に記載したものを5年間で全て確実にやるとは言えないものの、2040年や2060年といった将来を見通した中で、見直しをかけながら実現に向けて進めていきたい。

【伊藤委員】

- ・総合戦略（案）については、だいぶ良くなってきたのではないかと思っているが、何点か気になった部分があったので意見させていただく。まず商工業活性化プロジェクトについて、今後、創業支援計画を作っていくということであれば、創業の目

標をK P Iとして記載してはどうかと思う。それから再生可能エネルギーによる地域循環モデル推進プロジェクトについて、K P Iの町内会街路灯のL E D化率というのは数値目標として少し違和感があるので検討されてはどうか。また、今後の事業展開の記載順について、現在は太陽光が一番上に来ているが、町のポテンシャルを活かしていくということであれば、木質バイオマスの記述のほうを先にするなど、優先順位をつけていってはどうかと思う。総合戦略(案)についてはそれくらいで、非常によくなってきたのだと思う。

- ・総合戦略の4つの基本目標のうち、産業力の強化やエネルギーの事業化というところはかなり時間のかかる取り組みになる。中家委員から発言のあった定住や交流の促進というところは、どこまでいけるかという問題はあるにしても、まずはこの5年間、集中的に民間の活力も使いながら、行政と民間、商業団体等も含めて地域が連携してやっていって、当別というブランド力を発信していくことが、企業誘致にもつながってくるのではないかと。これから道の駅もできるので、そういったところを起爆剤としてやっていくために、提案のあったプロジェクトを、別途、戦略の中に記載していくと良いものになるのではないかとと思う。

【事務局】

- ・中家委員から頂いた意見については、非常に具体性のある提案で、事務局としては総合戦略の1つのプロジェクトとして盛り込んでいきたいと考えているところ。みなさんのご理解が得られれば、次回の会議までに内容を反映してみなさんにお諮りしたい。

【笠松委員】

- ・戦略に盛り込むとしても、実現可能性というものはよく検討されたほうが良いと思う。たとえばJ Rとのタイアップといっても費用がかなり必要であり、自転車のイベントについては空知でもうすでに取り組んでいるようなこともあるので、マーケットリサーチをされてから記載したほうが良いのではないかとと思う。

【事務局】

- ・具体的な事業として記載をするということではなく、それぞれのプロジェクトの理念というか、そういったところを十分参酌したものをプロジェクトとしておこしたいということ。

【山田委員長】

- ・伊達家のプロジェクトなどは、これまであまり検討されてこなかった部分でもあるので、次回までの短い期間の中で戦略に書き込めるかどうかはわからないが、可能な範囲で対応してほしい。

【笠松委員】

- ・イベントを記載するのではなく、哲学というか、アイデアを方向性として書いていくということであれば良いのかなと思う。

【中家委員】

- ・ 具体なところで、先ほどJRの関係で、広告的にJRを巻き込んでいくということではなく、いくなれば利用促進に向けてこちらのコンテンツに相乗ってもらえれば、JRが満杯で動くのではないかという話で、最初からJRに対してプロジェクトの実施に向けて広告として使わせていただきたいという話の展開はイメージしていない。それから空知の自転車の話については、どちらかというスポーツ文化の醸成に向けて今後定着させていくといった部分に近いと考えている。ですから、空知と同じようなイベントを当別で大々的にやって向こうを負かすとか、そういうイメージは持っていない。ただ、読売新聞で当別の自転車というコンテンツをやった際に、自転車に実際乗られている方々にはかなり反響があったことから、潜在的に当別に来ている方には、そこを起爆剤としてうまく広げていくというところは必要ではないかと感じている。

【南部委員】

- ・ 総合戦略の5年間という期間の中で、どのように実行していくかという戦略実行イメージとスケジュール感が現時点では足りていない部分だと思う。それぞれの基本目標やプロジェクトのプライオリティを整理して、行政の組織の中でどういうチーム構成で誰がリーダーとなってどこと連携して実行していくか、そういったことを整理していく必要があって、そうすれば戦略実行イメージがどんどんできていって、その中で新たに見えてきたことを再調整してGOサインが出てくるものだと思うので、それは今日の会議ではないのかもしれないが、そこがこの戦略のゴールだと思う。
- ・ この総合戦略は、町民をかなり巻き込んでいくものとなるので、そういった意味では、戦略を理解してもらうための最終的な実行イメージやチーム構成、プライオリティ、そういったものを整理して盛り込んでいくと非常にわかりやすく、説得力のある計画になるのではないかなと思う。

【事務局】

- ・ プロジェクトごとのプライオリティはまだ整理がついていないが、どこの部署がどういうスパンでどう展開していくのか、そこに町民や企業や事業所とどう連携していくかといったことを整理したチーム構成的なところは、役場組織に中である程度割り当てが決まっている状況にある。それぞれのプロジェクトの事業着手に向けては、役場の政策決定の場である政策調整会議のフィルターをかけながら、当該年度の事業としてどこまでいくのかというのを見定めていくことが、毎年毎年の作業として出てくると思っている。

【南部委員】

- ・ 5年という長いスパンなので、細かい実行イメージまではできないと思うが、5年という大枠の中での推移、実行イメージみたいなものを持つことは必要だと思う。

具体的なプライオリティというところまでは、やはりいろいろな部門と、いろいろな調整が非常に多岐にわたって必要な部分であるということはイメージできるので、大枠の部分での整理が必要だと思う。

【山田委員長】

- ・この委員会の答申と、町内関係団体等の提言をまとめて、最終的には町の政策調整会議の中で調整しながらやっていくということで考えておいて良いか。

【事務局】

- ・最終的な総合戦略という部分については、この策定委員会からいただく答申を基本的なベースとして、町民の方々からの意見、議会からの提案といったものをこの答申に加えて反映させていくというような作業を予定している。その中で、当面この5年でスタートさせていくべきもの、あるいは中長期的に、2040年、2060年に向けてのあるべき姿として方向性を示すにとどめざるを得ないもの、そういったものを整理し、10月末に総合戦略としてまとめ、国に提出をするというスケジュールで考えている。

【田辺委員】

- ・推進体制をきちんとしていくことがこれから重要になってくる。各プロジェクトのプレイヤーは町だけではないので、町民や民間事業者といったそれぞれの方々が、自分たちが関われる部分は何かというところを意識したうえで、推進管理、検証だけではなく、実際の推進に主体的に関与してもらえるような体制を作っていくことが必要。
- ・中家委員から提案のあった部分については、当別という町全体のブランドイメージというものを作っていくという視点をプロジェクトとして1つ立てるという事務局からの説明があったが、その際に当別町自体のブランド化、ブランドイメージ化という視点を入れてもよいのではないかと聞いていて思ったところ。
- ・災害に強いまちづくりプロジェクトのKPIとしての自主防災組織率というのは良いと思うが、それと事業展開に書かれている内容とが乖離している印象を受ける。事業展開との整合性を今一度整理されたほうが良いと思う。

【事務局】

- ・当別町は豪雪地帯であるということで、ハード事業ではあるが、例えば防風雪柵の整備率のようなものをKPIとして設定することを検討する。

【笠松委員】

- ・基本目標（3）の現状と課題の記載のところ、教育や子育てが女性の役割であるかのように読み取れる部分があるので、表現の仕方を整理されたほうがよいと思う。

【田辺委員】

- ・女性が住みたくなるようなまちづくりが必要であるという意見は前回述べさせていただいたが、その際の趣旨は、当別町は若い女性がどんどん外に出てしまっている

という課題があることから、年齢に関係なく、女性は健康で美しく暮らせる環境のまちというのが移住の決め手になるのではないかというところで、そういった部分を踏まえて表現を考えていただければよいのではないかと思う。

(以 上)